

空



2013・12

**SORA** 52号

管 玉

柴 田 佐知子

ご先粗を金の文字とし稲の花  
列すでに歪んでゐたる運動会  
身にしむやまた移さるる地藏尊  
思ひ出の父ばかりなり秋海棠  
月の出や何するとなく庭に出て  
眠るまで亡き人と和す良夜かな  
曲り屋をきちんと曲り秋の風  
月代や世を違へたる父に慣れ

鷹渡る立派な空となり  
にけり  
本堂へ進めば消ゆる雪の山  
爪先で走る僧坊軒つらら  
叱声の混じりてゐたる虎落笛  
堂凍てて僧の首筋美しき  
灯ともせば百鬼しりぞく雪の底  
底に筋つけて寒鯉動きけり  
豆を煮て厚着の母の午後が過ぐ  
泣いてゐる赤子を覗く耳袋  
聞耳を立ててをるなり竈猫  
樟脳の匂へる祖母の日向ぼこ  
常闇に鏡管玉雪が降る  
青空の中心にあり鷹の座は

夜 長 高倉 和子

蜜林檎 中田みなみ

大粒の雨に打たれて鳥渡る

峠路の夕日集めし唐辛子

すぐ終るつもり恋や唐辛子

源流の苔打つ雫身に入めり

遠回りしてゐるやうな穴惑ひ

合掌の屋根に誘はれ走り蕎麦

病むことに飽き七と母の夜長かな

夜火事見し列車に傘を忘れたり

号令とともに弾けて運動会

はじめて挽ぐ林檎に青い空のあり

田仕舞の煙ひと筋筑後川

クローバーの褥に林檎落ちにけり

柿熟るる誰も通らぬ道となり

幸せの一つにけふの蜜林檎

退屈な昼の公園冬の虫

神の留守予防注射の通知くる

平行 荒井千佐代

うつむかぬ 服部早菀

秋彼岸四隅の乾く四手網

稲妻にふちどられたる夜の雲

空の魚籠さげて抜けたる花野かな

うつむかぬ決意ありありオクラ成る

厄祓ふにはか巫女なり髪に菊

蓑虫もわれも後なし竜巻雲

重陽の絵皿を買うて帰りけり

風なくて寝つけぬ萩と思ひけり

平行に竿竹二本小鳥来る

ト口箱に植ゑて一学期棉は実に

秋の雨ボレロ半音づつ上がり

奥多摩に出没したる天狗茸

わが墓の未だからつば雁渡る

木犀や雨は小降りをよしとして

冬銀河記憶に赤き葉包紙

仏足石かこむ億万草の露

名札 柴田志津子

文化の日 だいじみどり

穂に出でし芒に風の吹く日かな

あといくつ加ふるよはひ種を採る

背をのべて齡諾ふ柿の秋

銀漢を指す物心つきし子に

拭きあげて秋日にかざす哺乳瓶

鉢巻を忘れたる子の運動会

胸元の名札はつきり敬老日

文化の日この世に誓ふことのなし

大前に帯の鈴鳴る七五三

寒さうな顔と思ひぬすれちがふ

満月や横顔ばかり過ぐる汽車

胸当を当てて坐りぬ芋煮会

伝言板にきのふの文字や神無月

芋煮の火ともに焚きたる君逝けり

鶴や夕日まともに陶工墓

記憶 野上 杏

りんご箱机の日々や雁渡る

貧しきころの記憶は楽しちちろ虫

柿を干す軒先ありし頃のこと

二・三步で捨つる木の実をまた拾ふ

真つ白に銀杏乾く母在らば

秋草を挿す頸長のガラス瓶

机広く使ひ一人の夜長かな

出自よき鰻を少し敬老日



福岡 山内 碧

聖地には聖なる石あり天高し  
つゆけしや線路の脇の花低し  
数珠玉のすでに暮れたる川の音  
生き伸びて紹る手足や秋気澄む  
毛布の子へ諍ふ父母の声とどく

糸田 宮井 知英

冷まじや人なき家の草の丈  
蘆刈の光をひろげつつ進む  
永久に眼をつむらぬ埴輪秋深し  
久女忌や語れば晴るる胸の中  
天領に枯蝻螂のころげ落つ

熊本 松田 明子

雨あとの一木一草秋はじめ  
虫籠を終の住み処として鳴けり  
子規祀る庵に文机あるばかり  
迂回して水通り過ぐ崩れ梁  
おざなりに水の触れゆく崩れ梁

糸島 小林 朱夏

曳山の鯛の尾鰭の反り返る  
退院の間近き母の蒲団干す  
着脹れて母に甘えてゐたりけり  
追ひ付けば人違ひなり宵恵比須  
寒星や布もて覆ふ父の顔



粕屋 長 憲 一

簑笠と田植の団子も消えにけり  
どんたくの顔ばかりなり総踊り  
雲あつめ大きくなりし夏の山  
経を読む声とちこむる蟬時雨  
蓮の露落とさぬほどの風渡る

粕屋 吉 田 菫

沈黙の潔きなり黒葡萄  
少年の秘密の墓地に零余子落つ  
硬山は町になじみぬ十三夜  
長き爪山車をはみ出すねぶたかな  
くづ魚の荷台に跳ぬる霜の道

長崎 鳳 蛮 華

高齢者に前期と後期やぶれがさ  
枕木の下砂利にも虫鳴ける  
虎杖の花の夕べとなりけり  
木の葉髪傷痕軍人絶えんとす  
秋雲へ詩吟は捻れまたねじれ

粕屋 秋 千 晴

新藁をくると束ね象の鼻  
牛小屋にお産準備の今年藁  
新藁に覆ひ被さり子も運ぶ  
毬をむき栗を見せ合ふ子供達  
人去りて毬の山なす栗林

福岡 あさなが捷

稜線をあらはに月の昇りたる  
頬に当てしんとなりたる林檎かな  
負けず嫌ひ一番に行く寒げいこ  
振り向かず闇に入りたる雪をんな  
指先に神を降ろしぬ夜の神楽

吉井 高倉 恵美子

秋うらら福祉バスにて詣でけり  
杖よりも伸びてゐたりし秋桜  
柿をむく夫と二人の時間かな  
誰も居ぬレントゲン室冬に入る  
はちきれさうな色となりたる実万両

須恵 苑 実耶

どの道も海へと伸びて涼新た  
七五三祖父が草履を持ちて蹤く  
一位の実昼はしづもる相撲部屋  
熱気球ぐんぐん昇る刈田かな  
群がれる落葉に抜かれ下校の子

福岡 矢野 百合子

ろうそくの焰よく伸ぶ今朝の秋  
群がりて群れてはをらぬ秋の草  
ごんぎつね現はれさうな稲の波  
オルゴール秋日にことば置くやうに  
神集ふ大社になびく国旗かな

福岡 亀井 紀子

川音の折り折り変はる九月かな

集落を結ぶ石橋荻の風

大鳥居ひとまはりして七五三

帯解けば大蛇のごとし夜の桃

そんなことどうでもよくて猫じやらし

兵庫 戸栗 末廣

あをあをと海荒れてゐる唐辛子

白波の沖に碎ける椿の実

秋冷や駿馬はいつも前を向き

銀漢や寺の真中を川流れ

からたちの棘やはらかし神の留守

東京 今井 春生

入院や秋の夕日に手をかざし

眼の内にレンズ入るる日鳥渡る

秋時雨看護師の語尾やはらかし

病院食に松茸飯や夢道の忌

十月のまぶしき空よ退院す

大阪 青木 朋子

少年に見下ろされたり休暇明け

底紅や匂のみ知りたる人の逝く

草もみぢ母のやうなる風よぎる

西方へ雲も芒も流れけり

鳥の飛ぶ青き空ごと地球浮く